# 松沢研究奨励賞受賞者 研究報告

「豊かな心でよりよく生きる子」をめざして

~学び合いによる価値の構築に迫る「特別の教科 道徳」の授業の工夫~ 横浜国立大学 大学院 教育学研究科 健康・スポーツ系教育専攻 H24年3月修了





#### 1 研究主題について

本年度から、道徳が「特別の教科 道徳」になった。生きる上で重要な道徳的価値について理解を深めるとともに、これから出会うであろう様々な出来事に対し、多面的・多角的に考え、判断し、適切に行動するための資質や能力を養うことが、今まで以上に強く求められている。

本校では、「教え伝える授業」から「考え心を育む授業」へと転換を図り、子どもたちの「生き方の選択肢」を広げる道徳の時間の工夫を目指してきた。教師も児童も一緒になって、ともに生きる一人の人間として自らを見つめ、自らに問いかけ、自己の成長を実感し合えるような授業を創り上げていきたい。そのような授業の積み重ねによって、将来に対する夢や希望、自らの人生や未来を切り拓いていく力を育む源になると考え、研究テーマを設定している。

## 2 研究授業について

# (1) ねらいとする内容項目について

国際理解、国際親善の内容項目では、違いを理解し合うことが、互いを尊重し合う上で大切である。しかし、違いを見つめていく前に、みな同じ人間だという視点に立ち、世界中で共通している思いは何なのかを理解することも重要だと考えた。認め合い、尊重し合いながら、全世界の人々が手を取り合い、支え合える世界こそ、本当の意味での"平和な世界"だと思う。"平和な世界"を創り上げていける人材を育てることを視点に置きながら、「国際理解、国際親善」の授業に臨んだ。

# (2) 教材と指導観について

教材 … 学研「みんなのどうとく」 3 年 ささえあって生きること『メッセージ』 内容項目 … C- (17) 国際理解、国際親善

本教材は、『ネパール大地震や東日本大震災の際、 被災した人を助けようと多くの国から救助隊が来た り、応援メッセージが届けられたり、多くのボラン ティアが駆けつけてくれたりした。』という内容であ る。なぜこのような復興支援・人助けが盛んに行わ れたのかを考えることで、国は違っても、人を思い やり、親切な行為をしたいと思う心が、世界中で共 通していることを理解させたいと考えた。

#### (3) 本時のねらいについて

授業づくりの視点をより明確化し、評価の視点をより具体化するために、3つの観点に分けてねらいを設定した。観点別に評価を記述するわけではない。

#### ① 道徳的理解・判断力

国は違っても、人を思いやり、親切な行為をしたいと思う心が、世界中で共通していることを理解する。

#### ② 道徳的心情

そのような心を大切にすると, "よい世界"に つながっていくと感じる。

# ③ 道徳的実践意欲や態度

そのような心を大切にしようとする意欲を高める。

#### (4) ねらいに迫るための指導の手立て

#### ① 深く考えさせる発問の工夫

シンプルな発問を一貫して行うことで,価値の 本質に迫ることができるようにする。

#### ② 主体的・対話的で深い学び

児童の意見をしっかり取り上げ、主体的に授業 に関わることができるようにする。

### ③ 道徳ノートの活用

児童の導入と終末のノートの記述から, ねらい に迫れたかどうかを見取る。

# 3 指導の手立てを視点とした授業報告

#### (1)「深く考えさせる発問の工夫」の視点

価値の本質に迫れるように、シンプルな発問を一貫して行った。国際理解、国際親善の価値の本質として「自国と他国の違いを理解し合い、尊重し合うこと」が考えられるが、本授業では、教材を生かすために、導入・展開・終末を通して「世界中で共通しているものは何か」をテーマに発問した。導入ではほぼ意見が出なかったが、教材を読み「助け合おうとする気持ちがあること」や「命を大切に思うこと」など、世界に共通する思い・願いを見つけることができた。終末では、思いやりの心が世界共通であることや、日本と世界の違いを理解し合う重要性に気付くことができた。一部の児童は「もっと違いを理解していきたい」と意欲を高めることができた。

課題は、一部の児童が「違いを理解し合うことの よさ」に気付き始めたにもかかわらず、本時では追 及していかなかったことである。授業者は、授業の

流れに一貫性をも たせたかったの 追及しない判断に したが、本質に対 かう気付きに対 で 問い返 せ を深めさせる が あったと感じる。



## (2)「主体的・対話的で深い学び」の視点

主体的・対話的で深い学びへ向けて、「児童の意見をしつかり取り上げ、主体的に授業に関わることができるようにする」という手立てを講じた。担任が、発表する児童の意見を取り上げることに主眼が置かれてしまっていたため、児童同士で話し合い、学び合う機会を与える意識が薄れてしまった。授業内の様々な場面で、児童同士の対話を生み出していくことが、より多様な考え方に広がっていくと感じた。

「国際理解,国際親善」に関する知識が少ない3年生に対し、授業の導入では、ICT機器を使用して、世界の国の数や世界の人口についてクイズも用いて紹介した。「国際理解、国際親善」への関心を高め、主体性を生むことに役立ったと感じる。道徳の時間にもICTを活用する展開が必要だと感じた。

#### (3)「道徳ノートの活用」の視点

道徳ノートの活用として、授業の導入と終末にノートに記述させ、ねらいに迫れたかどうかを見取ろうと考えた。授業の導入から終末までの児童の考えの変容を、ある程度見取ることができたと感じる。道徳的理解・判断力のねらい「国は違っても、人を思いやり、親切な行為をしたいと思う心が、世界中で共通していることを理解する。」と、道徳的心情のねらい「そのような心を大切にすると、"よい世界"につながっていくと感じる。」は達成できていることが見取れた。道徳的実践意欲や態度のねらいの「そ

のような心を大切 にしようとする意 欲を高める。」を達 成できている児童 は少なかったので, 授業後の発展で,そ のような意欲を高



めさせていきたいと感じる。

協議で出された課題が四つある。一つ目は、ノートに記述させる時の指示の出し方を、もっと単純明快にすること。二つ目は、書く時間と、話し合う時間を明確に分けること。三つ目は、時間を確保し、じっくりと書かせること。四つ目は、書いた内容を元に、児童同士で学び合う機会を設けられるとよいこと。これらの課題を修正し、効果的にノートを活用することで、児童の考えを見取り、より適切な評価をしていきたい。

#### 4 成果と課題

- ・「国際理解,国際親善」に関する知識が少ない児童に対し、世界中には多くの国があることや、世界中に多くの外国人がいることなどを理解させた上で、世界中で人を思いやり、親切な行為をしたいと思う心が共通していることを考えさせた。世界についての知識が少ないことを自覚するとともに、共通する大切な部分があることにも気付くことができた。「国際理解、国際親善」に対して、多様な考え方ができるようになった。
- ・「国際理解、国際親善」の価値の本質へ向かうため、発問の精選をするとともに、児童同士の学び合う機会をもっと取り入れていく必要がある。